**角突き：伝統的な牛の相撲**

円形の闘牛場で2頭の力強い牛が対決します。額が触れあった状態で、勢子に促されて牛は押し合い、強さと決意を示します。相撲を彷彿させるこの*角突き* (角を使った格闘) は、小千谷の山々が起源だと考えられている闘牛の一種です。このスポーツは、神事をルーツとし、1,000年の歴史を有します。この種の闘牛では、牛が死傷しないよう、徹底的な対策が取られます。長く消耗する試合は避けられ、審判が試合の判定を下します。

*角突きの伝統*

かつての小千谷の山岳地域では、長距離の運搬や棚田の耕作において牛が不可欠な役割を果たしており、崇められていました。当地の*角突き*は、神々に捧げる神聖な儀式の一部として始まったと考えられています。相撲と同様、*角突き*の起源はかつての神道の儀式へ遡ることができます。

小千谷では、岩手県南部の短角牛が、その丈夫な四肢とこの地域の長く厳しい冬に耐える能力から、ずっと好まれてきました。

*角突き、神道、相撲*

その年最初の競技は、神職によるお清めの儀式から始まります。各競技の前には、勢子がお神酒を一気に飲むことで自身を清めます。それから、牛の尾から頭へと酒がかけられます。これは、牛が後退ではなく前進してほしいという願望を象徴する行為です。試合開始前には、お清めの一環として、競技場一帯にお酒と塩がまかれます。

試合の際は、まず勢子がそれぞれの牛を引き、競技場を時計回りにまわります。それから、手を叩いたり牛の尻を叩いて促すことで、2頭の牛を向き合わせます。牛が位置に着いたら、試合が始まります。審判が試合終了を宣言し、勢子が牛を引き離すまで、牛は角をがっしりと絡め合って「闘い」ます。牛は神聖な動物だと考えられているため、怪我をしないよう厳しい対策が取られます。試合中に事故が生じた場合は、競技場に塩がまかれ、お清めが行われます。

相撲と同じように、最高位の牛は競技の最後に闘います。最後の3試合は、*終い三番* (最後の大きな3試合) と呼ばれます。高位の牛には、赤・白・黒の装飾的な綱 (*面綱*) が首周りに掛けられます。面綱は強さを象徴するもので、相撲の力士が身に着ける化粧まわしを思わせます。

*角突き*の多くの面は長年変わっておらず、1978年には日本の重要無形民俗文化財に指定されるに至りました。5月から11月にかけて、月に一度、1日に15～20試合が行われます。